

子育てサークルに集う母親たちの育児不安と家族機能

中久喜町子¹⁾ 釜島美智代¹⁾

要 旨

子育てサークルに加入している会員を対象に、サークルを知ったきっかけ・入会の理由、参加者の育児不安と家族機能の様相、育児不安と家族機能の関係を明らかにすることを目的に質問紙調査を行った。その結果以下の5点が明らかになった。1) 子育てサークルを知ったきっかけは、山梨県内居住年数10年以下の母親が「友人、口コミ」と回答している。2) 子育てサークルへの入会理由は、子どもの人数1人あるいは2人の場合は「子どものため」に入会し、3人以上の場合は「自分のため」と答えている。3) 育児不安特性では「イライラの状態」が最も高い。不安得点は職業の有無と関連があり、無職の母親の育児不安が有意に高い。4) 家族機能については現実と期待の差が大きいのは夫に関する項目で、夫の具体的な育児サポートではなく、妻自身へのサポートに対する差が大きい。5) 期待と現実の差が大きい方が育児不安得点が高い。

キーワード：母親、子育てサークル、家族機能、育児不安

1. はじめに

過疎地域における孤立した子育て、情報が氾濫する都会での孤立した子育て、おかれた状況は異なるが、孤立した子育ては母親に社会からの距離を感じさせ、また「なぜ私だけが」という子育てに対する否定的な感情を呼び起こすことになる。孤立した子育ては母子相互作用を妨げるといわれ、母親自身の子育てに対する自信、子どもの心身の発達にも影響を与えと考えられている。さらに近年は育児不安の増大との関連性も指摘されている。

本研究は平成12年度山梨県立看護大学共同研究費による研究で、研究の概略は「地域における自発的子育てサークルの活動に関する研究」報告書¹⁾で明らかにしている。報告書では子育てサークル参加の動機、参加による生活の変化を把握し、母親にとっての子育てサークル活動の意味を明らかにした。

本報告は育児不安と家族機能に注目し、自発的に結成した子育てサークルに集う母親たちがどのような実態にあるのか明らかにすることを目的としている。

育児不安に関する研究では牧野による育児不安尺度関連の研究があげられる²⁾³⁾。牧野は育児不安を「健康な育児行動を阻害するような一種の負荷事象を主観的に表明したもの」としてとらえ、尺度開発を行い、それらと関連する母親や家族要因について分析している。また川井らは、牧野とは違う観点で育児不安をとらえ育児不安を二つのタイプに分け、それぞれのタイプ別に援助の方向を示している⁴⁾。川井らは「母親としての自己信頼感のなさ、無能感、無力感」に対しては「母性性の発達」を援助する必要性を述べている。しかし山崎は、現代の育児中の女性は「母親としての自己」と「母親以外の自己」の二つの自己の充実を望んでいるとして、母性性だけを前面に押し出すことの危険性を指摘している⁵⁾。母親の育児不安に関連する要因の研究では、中津や榎本らによって家族との人間関係、子の出生順位、家族外の人間関係などが指摘されている⁶⁾⁷⁾⁸⁾。

家族機能についてもいくつか尺度開発がなされ利用されている。ここでは家族エコロジカルモデルに基づいて、家族と各メンバーとの関係、家族とサブシステムとの関係、家族と社会との関係を

(所 属)

1) 山梨県立看護大学

(専攻分野)

小児看護学

網羅した法橋らの研究によって作成された尺度を採用する⁹⁾¹⁰⁾。この三つの関係は育児不安に影響を与える基本的な項目を含んでいるからである。

子育てサークルで活発に活動し、同じような仲間を持つ母親の育児不安はどのような特徴を持つのか、またサークル活動を行っている母親の家族機能に対する認識はどのようなものであるのかに焦点をあてて分析を行う。

2. 研究目的

自発的に結成された子育てサークルに集う母親たちの育児をめぐる状況を把握し以下の点を明らかにする。

- 1) 子育てサークルを知ったきっかけと入会理由の特徴を明らかにする。
- 2) 子育てサークル参加者の育児不安の様相を明らかにする。
- 3) 子育てサークル参加者の家族機能の様相を明らかにする。
- 4) 育児不安と家族機能の関連を明らかにする。

3. 研究方法

1) 研究デザイン

実態把握を主な目的とした自記式質問紙を用いた質問紙調査である。

2) 調査対象者

「ママネットやまなし」に加入しているサークルのうちの現役サークル28の会員490人。郵送法によって27サークル、281人から回答があり（回収率57.2%）、そのうち有効回答は279人であった（有効回収率56.8%）。分析対象とした279人の基本的属性は表1に示すとおりであった。

3) 調査期間：平成12年10月～12月

4) 本研究での分析項目

(1)子育てサークルへの入会のきっかけと入会理由

(2)育児不安の程度と内容

牧野による育児不安尺度14項目を用いて測定した²⁾。育児に関する不安徴候は以下の5つの特性（Ⅰ、一般的疲労感、Ⅱ、一般的気力の低下、Ⅲ、イライラの状態、Ⅳ、育児不安徴候、

表1 回答者の基本的属性

N = 279

属性	項目	人数(%)
年齢	最低	22歳
	最高	40歳
	平均	31.7歳
	標準偏差	3.43
最終学歴	高等学校まで	107(38.4)
	専門学校・短期大学	135(48.4)
	大学以上	35(12.5)
	無回答	2(0.7)
職業	会社員	6(2.2)
	公務員	2(0.7)
	自営業	5(1.8)
	パートアルバイト	11(3.9)
	無職（家事専業を含む）	240(86.0)
	その他	4(1.4)
子どもの人数	無回答	11(3.9)
	1人	95(34.1)
	2人	137(49.1)
	3人	43(15.4)
山梨県居住年数	4人	4(1.4)
	最短	1年
	最長	40年
	平均	21.4年
家族構成	標準偏差	12.8
	核家族	204(73.1)
	三世代家族	63(22.6)
	その他	8(2.9)
	無回答	4(1.4)

Ⅴ、育児意欲の低下）から構成されている。各設問は「良くある」から「まったくない」までの4段階のリッカート尺度で回答してもらった。なお、育児不安の定義は牧野によるものを採用し、「子の現状や将来あるいは育児のやり方の結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」とした。

(3)家族機能

家族機能はFFFS日本語版Ⅰの一部を用いて測定した。質問項目は特に母親の育児不安に影響を与える家族内の人間関係、母親の生活のあり方、母親の社会関係に焦点をあてて選択した。各設問は「現在のどの程度あるか」「どの程度あると望ましいか」「どの程度重要か」から構成されており、「1＝ほとんどないあるいは重要で

ない」から「7＝たくさんある、あるいは非常に重要」までの7段階のリッカート尺度で回答してもらった。

5) 分析方法

(1)子育てサークル入会のきっかけと入会理由については、回答者の基本的属性との関係を検討した。

(2)育児不安の特性はポジティブな設問に関しては配点を逆にし、不安が高いほうが高得点になるようにした。その後、基本的属性との関係を検討した。

(3)家族機能については「どの程度あると望ましいか」と「現在どの程度あるか」の差を算出し(d得点)、育児不安との関係を検討した。

有意差の検定は5%水準で行い、質的変数には χ^2 乗検定、量的変数には平均値の差の検定を行った。統計ソフトはSAS社のJMPIN version4Jを使用した。

6) 倫理的配慮

ママネットやまなし代表者会議で代表に調査の主旨、目的、プライバシーの保護を説明し会員に調査票の配布を依頼した。会議を欠席した代表には郵送で同様の説明と依頼をした。回収は全て無記名で個別に直接研究者宛てとした。

4. 結果

1) 対象者の基本的属性とサークルを知ったきっかけや入会理由との関係

サークルを知ったきっかけを「友人の誘いや口コミ」と「広報、その他」の二つに再分類し、入会理由は「自分のため」、「子どものため」、「その他」の三つに再分類し基本的属性と関係を検討した。結果は表2に示すとおりであった。

表2 基本的属性等と不安得点との関係：p値

独立変数	従属変数
年齢	育児不安得点
最終学歴	N.S
職業の有無	0.0512
子どもの人数	0.0171
居住年数	0.0505
家族構成	N.S
入会のきっかけ	N.S
入会理由	N.S
家族機能のd得点	<.0001

(1)年齢

回答者の年齢は表1に示すとおりで、22歳から40歳に分布しており、平均31.65歳(標準偏差3.43)であった。年齢を30歳未満、30歳～34歳、35歳以上に3区分してサークルを知ったきっかけや入会の理由に差があるかどうかを検討した。その結果、年齢によって差があるとはいえないという結果となった。

(2)最終学歴

最終学歴によってサークルを知ったきっかけや入会理由に差があるかどうか検討した。その結果、最終学歴によって差があるとはいえないという結果となった。

(3)職業の有無

職業を無職の専業主婦とパート・アルバイトを含めた有職とに2分類し、サークルを知ったきっかけや入会理由に差があるかどうか検討した。その結果、職業の有無によって差があるとはいえないという結果となった。

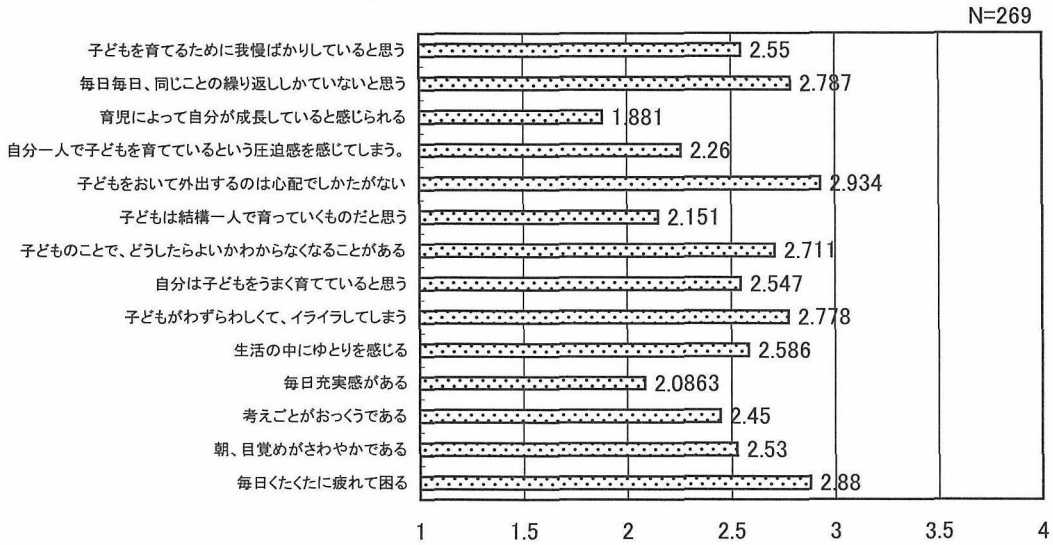
(4)子どもの人数

子どもの人数を「1人」、「2人」、「3人以上」に3分類し、サークルを知ったきっかけや入会理由に差があるかどうか検討した。その結果、子どもの人数によってサークルを知ったきっかけには差があるとはいえないという結果となった。しかし入会理由については子どもが「3人以上」の場合は「自分のため」が最も多く、子どもが「1人」あるいは「2人」の場合は「子どものため」が最も多く子どもの人数によって入会理由には有意な差があるといえる($p=0.039$)。

(5)山梨県居住年数

居住年数を「1年～10年」、「11年～30年」、「31年以上」に3分類し、サークルを知ったきっかけや入会理由に差があるかどうか検討した。その結果、居住年数が「10年以下」の場合「友人の誘いや口コミ」がサークルを知るきっかけになっているが、「11年以上」の場合は「広報・その他」がサークルを知るきっかけになっており、居住年数は有意な差とはいえないが、差の傾向が見られた($p=0.054$)。入会理由に

図1 各質問項目の平均点



については居住年数が10年以下の場合は「自分のため」が最も多く、居住年数によって入会理由には有意な差があるといえる ($p = 0.047$)。

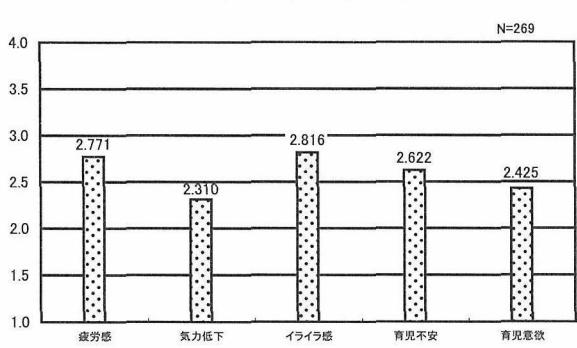
(6)家族構成

家族構成を核家族とその他に2分類し、家族構成によってサークルを知ったきっかけや入会理由に差があるかどうか検討した。その結果、家族構成によってサークルを知ったきっかけや入会理由には差があるとはいえないという結果となった。

2) 育児不安の程度と内容

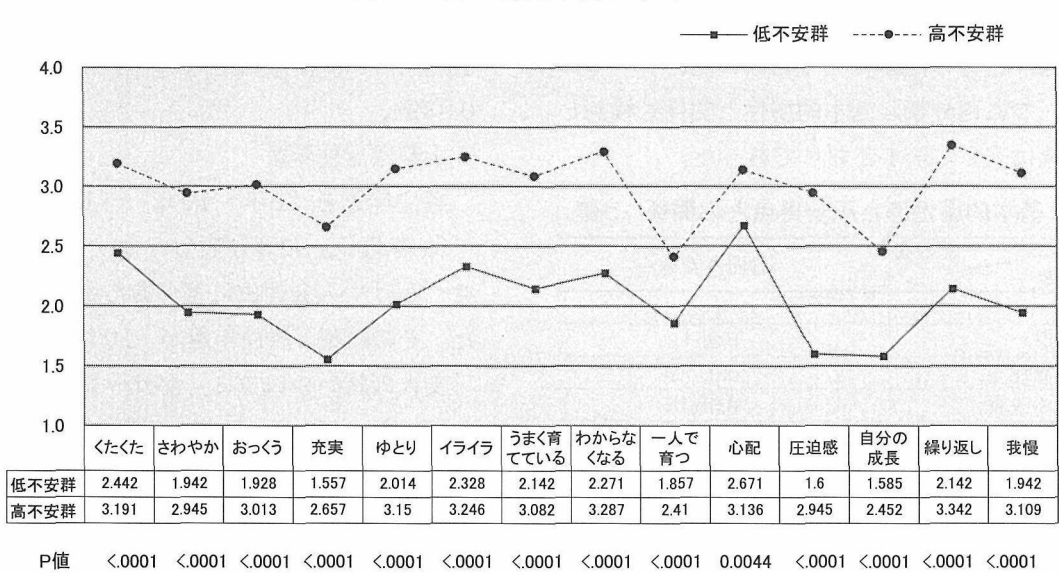
自発的子育てサークルに集う母親たちの育児不安はどのような特徴をもつものか、牧野の育児不

図2 育児不安特性の平均点



安尺度を使用し測定を試みた。その結果、最高49点、最低18点、平均35.1点(標準偏差5.52)で、回答者の各質問項目の分布は図1に示すとおりであった。全14項目を5つの因子にまとめ、平

図3 2群の育児不安の平均点



均値を算出すると第Ⅲ特性「イライラの状態」が最も高く2.816、最低は第Ⅱ特性「一般的気力の低下」で2.310であった。各特性の分布は図2に示すとおりであった。

次に育児不安得点によって高い群の25%、低い群の25%をそれぞれ高不安群（39点～49点）73人（27.14%）、低不安群（18点～31点）70人（26.0%）、中間群（32点～38点）126人（46.8%）とした。高不安群と低不安群の各質問項目の得点分布は図3に示すとおりであった。各質問項目の両群の得点の平均値の差の検定によってどの項目にも有意な差があることが分かった。

「子どもをおいて外出するのは心配でしかたがない」だけが $p = 0.0044$ でその他は全て $p < 0.0001$ であった。

回答者の基本的属性とサークルを知ったきっかけ及び入会理由によって不安得点の平均値に差があるかどうかを検討した。

(1)基本的属性と育児不安の程度

回答者の年齢（3区分）、最終学歴（3区分）、職業の有無（2区分）、子どもの人数（3区分）、山梨県居住年数（3区分）、家族構成（2区分）によって不安の程度に差があるかどうか不安得点の平均値の差の検定を行った。結果は表2に示すとおりであった。年齢、山梨県居住年数、家族構成については差があるとはいえないという結果となった。しかし職業については有職の平均値32.67点、標準偏差1.11に対し、無職の平均値35.48点、標準偏差0.36で有職が低く有意な差があった（ $p = 0.0171$ ）。

また子どもの人数と最終学歴については有意な差とはいえないが、差の傾向が見られた。子ども二人の場合の平均値が最も高く、学歴は専門学校・短大、大学、高等学校の順に平均値が高くなっている。

(2)サークルを知ったきっかけや入会理由と育児不安の程度

サークルを知ったきっかけや入会理由によって育児不安の程度に差があるかどうか、不安得点の平均値の差の検定を行った。結果は表3に示すとおりで、知るきっかけや入会理由によっ

て不安得点の平均値には差があるとはいえないという結果となった。

表3 基本的属性ときっかけ・理由との関係：p値

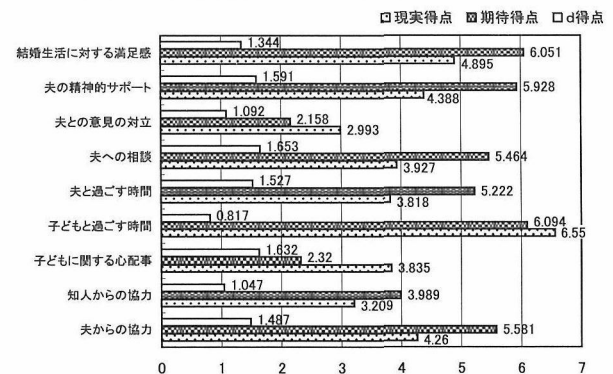
独立変数	従属変数	入会のきっかけ	入会理由
年齢		N.S	N.S
最終学歴		N.S	N.S
職業の有無		N.S	N.S
子どもの人数		N.S	0.039
居住年数		0.054	0.047
家族構成		N.S	N.S

3) 家族機能d得点と育児不安得点平均値の関係

家族機能測定各設問に対し「現在の程度あるか＝a得点」と「どの程度あると望ましいか＝b得点」の差の絶対値を算出した結果、絶対値の合計は最大33点、最小0点、平均12.29点、標準偏差7.13でd得点の分布は図4に示すとおりであった。d得点の値が大きいほど期待と現実のギャップが大きいということになる。ギャップが大きい項目は「夫と話す時間」「夫の精神的サポート」「夫と過ごす時間」の順で、夫に関わるものに期待と現実の差が大きい。「子どもに関する心配事」は差として出ているが、「現在の程度あるか（平均3.835）」「どの程度あると望ましいか（平均2.320点）」であるためマイナスのギャップではない。

値の大きい順から約25%を高ギャップ群、小さい方の25%を低ギャップ群とすると、前者は17点～33点（70人26.32%）、後者は0点～6点（61人22.93%）、中間群は7点～16点（135人

図4 家族機能項目の平均点



50.75%) の3グループとなった。

次に家族機能d得点の差によって育児不安得点平均値に差があるかどうか検討した。その結果、d得点が低い群ほど育児不安得点が低く、d得点が高い群ほど育児不安得点が高く、F値37.46、 $p < 0.0001$ という結果が得られ、有意な差があることが分かった。

5. 考察

育児不安に関連することが予測される要因として(1)母親自身の要因(年齢、職業の有無、就労形態)、(2)家族の人間関係の要因(家族形態、夫との関係たとえば話し合う時間など、子どもとの関係たとえば人数や年齢)、(3)母親の生活のあり方(子どもとの一体感、性別役割分業)、(4)母親の社会的活動と社会関係(近所づきあいの広さと深さ、家族以外の友人関係の様子、学習活動などの社会参加)があげられている。

母親自身の要因は母親の基本的属性と一致する項目が多い。また家族内の人間関係の中の家族形態、子どもの人数、子どもの年齢を母親の基本的属性の中に入れると、家族内の人間関係は夫との人間関係に焦点化される。家族外の関係では母親の友人関係が大きな意味を持つことがこれまでの研究で明らかになっている。子育てサークルに参加している母親のサークルを知ったきっかけと入会理由、育児不安、家族機能について考察する。

1) 子育てサークルを知ったきっかけや入会理由について

母親の年齢や学歴、職業の有無、家族構成によってきっかけや入会理由に差があるとはいえない。この設問で差があったのは居住年数と子どもの人数であった。

子育てサークルを知ったきっかけは「友人に誘われて」が最も多く、チラシや広報、新聞(合計37.7%)を引き離している¹⁾。居住年数との関係で見ると10年以下の母親に「友人に誘われて」と答える傾向があり、予測と逆の結果が出た。山梨県に住むきっかけは「結婚や夫の転勤による」ものが34%で、60%は「出身地だから」と答えている¹⁾。母親の年齢から、居住年数10年以下の人は結婚

や転勤によって県内に転入してきた人たちと考えられる。地域に知人のいない母親は広報やチラシを手がかりに情報を集め、長く地域で暮らし友人ネットワークを形成している母親は「友人や口コミ」で情報を集めると考えたが、結果は逆であった。「周囲に同世代の子どもがいない」、「相談相手がいらない」ために母親はそれを解決するために子育てサークルに入会するが、母親は何らかのかたちで同世代の子どもをもつ母親と交流し、子育てに関わる情報を手に入れていると考えられる。

子どもの人数が「1人あるいは2人」の場合は「子どもに友達がほしい」といって入会する。しかし子どもの人数が3人以上になると母親は「自分に友人がほしい、家に閉じこもりたくない」という自分のための理由が多くなり、子どもの人数によってサークル入会理由に差が見られた。

サークルに通う子どもの約半数が第1子であることから(153人)¹⁾、「子どもに友人がほしい」ということは少子社会において切実な思いなのだろう。それに対して子どもが3人以上いる母親は、きょうだいがその役割を代替する部分があるので、子育てに24時間を費やしている現実を離れて「自分に友人がほしい、家に閉じこもりたくない」という理由にも納得できる。

2) 育児不安について

図1でまず目につくのは4点満点の質問項目のうち2点以下の項目は14項目中1項目だけという点である。項目は得点が高いほど育児不安も高くなるように設定されている。「子どもを置いて外出するのはとても心配である」が、反面「子どもがわずらわしくいらいらしてしまい」、「毎日同じことを繰り返す」、「くたくたに疲れている」母親の状況が見て取れる。

牧野氏が尺度開発のために調査を行ったのは1981年のことで、当時の調査結果は最高点49点、最低点19点、平均値32.9点であった。牧野氏の調査では対象者の約4割がフルタイム有職者であったことが今回と大きく異なる点である。これまでの調査でも無職の専業主婦は育児不安が高いことが報告されている。今回の調査でも同様に、職業の有無によって育児不安得点に有意な差が出

ている($p=0.0171$)。乳幼児期の子どもを持つ母親が働くことに関しては賛否両論があることは事実だが、専業主婦の育児不安が高いことも指摘されていることである。

なぜ、専業主婦の育児不安は高いのか、いくつかのことが考えられる。第一に専業主婦は専業であるがゆえに子育てに時間的に集中せざるを得ない。結果としてその他の社会関係から断ち切られることになる。現代の母親は結婚前に社会人として活躍した経験を持っている。その中で行った仕事に対して評価がなされ自尊心を形成してゆく。しかし育児は家の中で行われ、だれにも評価をされることはない。「子どもの笑顔や子どもの成長が評価」というのはもっともな話しであるが、それは次元が違うことである。

有職の母親は育児と仕事に追われ、時間的に余裕のない生活を送ることになるが、仕事に集中するときは子どものことを忘れ、何よりも子どもから離れることができる。周囲から「母親以外の自分」を期待される。二つの自己の充実を望んでいる現在の女性⁹⁾にとって有職であることは物理的・一時的に子どもから距離をおくことによって育児不安を低くする結果をもたらしていると考えられる。

第二に専業であるがゆえに夫が育児に時間と関心をあまり示さなくてもよい状況が作られることである。そのため、核家族であれば一層母親1人に責任がかかるため、「子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある」と不安を募らせることになる。これを「1人っきりの子育て」と言ってよいだろう。この点については家族機能の観点から考察する。

今回の結果は対象者の86%が専業主婦であるにもかかわらず20年前の結果と大差ない。平均点は今回35.1、牧野の調査平均点32.9点で、20年前の調査結果の方が低い。育児不安は時代を経るごとに広がり、深刻さの度合いを増し、誰か特定の母親に見られるものではなく、誰にでも起こりうることで認識されるようになった。本来ならば20年後の結果は対象者の有職者と専業主婦の比率を同様にしても、育児不安はより高くなって

いることが予測される。専業主婦の比率が高くなれば一層不安は増すと考えられる。

今回の結果が専業主婦比率が高いにもかかわらず、また20年後の調査であるにもかかわらず平均点、最高点、最低点に大差ないのは子育てサークルでの母親どうしの交流が大きく影響していると考えられる。

自発的な子育てサークルは家族外の人間関係に広さと深さをもたらす、そこに参加することによって同世代の、同じように子育てに多くの時間を割いている母親に出会うことになる。本来子育てサークルは母親であるからこそ参加できた場であるが、母親はそこで「わが子から必要とされる自己」=「母親としての自己」¹⁰⁾以外の自己を取り戻すことになる。幼児言語ではない言語でやり取りし、生活の充実感や一緒に行動する友人を見出している¹¹⁾。また子育てサークルは、「なぜ私だけが」という思いや、「毎日毎日同じことの繰り返し」という思いを共有し、「自分だけではない」と実感する機会を提供することになる¹²⁾。

以上のことから「一人っきりの子育て」の状況そのものに変化がなくても、それを共有してくれる仲間がいることが子育てサークルに集う母親の育児不安を低くしていると考えられる。

3) 家族機能について

育児を行う母親をだれがサポートするのか、夫に対する期待が高いのは当然であるが、インフォーマルなネットワークで言えば妻方の母、もし妻に姉妹がいるならば彼女たち、そして妻の友人、ソーシャルサポートには専門職もあげられるだろう。なぜここに近隣が登場しないのか、それは妻が選択したネットワークでなければ、妻にとって、特に他地域から転入してきた妻にとって近隣はサポート源として位置づけられていないからである。

今回の調査で最もd得点が高いのは「夫に関心事や心配事を話す時間(1.653点)」で、期待点が最も高いのは「夫からの精神的なサポート(5.928点)」であった。「精神的サポート」の現実点は4.388点で、「夫の家事・育児に対する協力」の現実点は4.260点である。夫は家事・育児への協力

より精神的サポートをよくやってくれていると評価されている。しかし精神的サポートへの期待点の方がより一層高いため、d得点は最も高くなってしまっている。確かに妻は夫に対して家事・育児協力を期待しているが、現実には夫が家にいる時間が限られていることから、時間的に期待しても叶えられないことは分かっているだろう。そのため家事・育児への期待点は比較的低くなっていると考えられる。

一方、「話す時間」や「精神的サポート」は家事や育児のように具体的な何かをしてほしいというのではないため、家事・育児協力ほど時間の制限を受けない項目である。そのため妻自身へのサポートに対する期待は一層高くなると考えられる。

妻が期待しながら現実にはかなえられていない項目(d得点)、それは夫に対するものである。「結婚生活に対する満足感」には大きなギャップはないにもかかわらず、「夫からの精神的なサポート」「夫に関心事や心配事を話す時間」「夫と過ごす時間」については期待しながら得られていないことをうかがわせる。妻は夫に対して具体的な育児行動ではなく、妻と一緒に過ごし話をすることを期待しているのである。

期待と現実のギャップを大きくしているのは夫に関連することであることは明らかである。またd得点の高さによって不安得点に差があることも前述したとおりである。母親の育児不安に関しては夫の妻に対するサポートが大きな影響力を持つことがわかった。

6. 結論

- 1) 子育てサークルを知ったきっかけは、結婚や夫の転勤によって転入してきた山梨県内居住年数10年以下の母親が「友人、口コミ」と回答し、何らかの方法で同世代の子どもをもつ母親と交流し、育児に関する情報を入手している。
- 2) 子育てサークルへの入会理由は、子どもの人数1人あるいは2人の場合は「子どものため」に入会し、3人以上の場合は「自分のため」と答えている。
- 3) 育児不安特性では「イライラの状態」が最も

高かった。不安得点は職業の有無と関連があり、無職の母親の育児不安が有意に高かった。

- 4) 家族機能については現実と期待の差が大きいのは夫に関する項目で、夫の具体的な育児サポートではなく妻自身へのサポートであることが明らかになった。
- 5) 期待と現実の差の大きいほうが育児不安得点が高いことが明らかになった。

参考文献

- 1) 佐藤京子他：地域における自発的子育てサークルの活動に関する研究，平成11・12年度山梨県立看護大学共同研究費助成研究成果報告書，2001年
- 2) 牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉，家庭教育研究所紀要No.3，34～56，1982年
- 3) 牧野カツコ：〈育児不安〉の概念とその影響要因についての再検討，家庭教育研究所紀要No.10，23316，1988年
- 4) 川井尚他：育児不安に関する基礎的検討，日本総合愛育研究所紀要第30集，27～39，1993年
- 5) 山崎あけみ：育児期の家族の中で生活している女性の自己概念，日本看護科学会誌，Vol.17，No.4，1～10，1997年
- 6) 中津育子他：幼稚園生活における用事の不安感情に関する研究，小児保健研究第55巻第4号，530～536，1996年
- 7) 榎本妙子他：育児不安の実態と関連要因の検討（第2報），京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要第8号，163～172，1999年
- 8) 福本恵他：育児不安の実態と関連要因の検討（第1報），京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要第8号，155～162，1999年
- 9) 法橋尚宏他：FFFS（Feetham家族機能調査）日本語版Ⅰの開発とその有効性の検討，家族看護学研究第6巻第1号，2～10，2000年
- 10) 才木クレイグヒル滋子他：日本語版Feetham家族機能検査の検討，小児保健研究第54巻第5号，616～620，1995年

付記：本研究は、山梨県立看護大学共同研究費による研究である。

Childrearing anxiety and Family function of the mother gathering in a childrearing circle

NAKAKUKI Machiko, KAMASHIMA Michiyo

Key Words : Mother, Childrearing-circle, Family function, Childrearing anxiety